

氏名	阿 部 猛
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	甲 第 2 8 2 号
学位授与の日付	昭和43年9月30日
学位授与の要件	医学研究科内科系小児科学専攻 (学位規則第5条第1項該当)
学位論文題目	人工栄養自律哺乳に適した粉乳汁の蛋白組成に関する研究
論文審査委員	教授 浜本英次 教授 水原舜爾 教授 橋本 清

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

著者は人工栄養自律哺乳に適した粉乳汁を作成せんとして、この為には生後1～2ヶ月の幼若乳児期にみられる容量的大量摂取の現象を説明するの必要を感じた。そこで、かかる現象が摂取蛋白の不足の為に生じたのではないかと考え、比較的高蛋白組成（蛋白濃度2.42g%、蛋白cal%11.5）の粉乳汁で健康乳児をad libitum に哺育し、これら乳児の身体発育状況、窒素出納、血液諸性状値、蛋白分解産物の尿中排泄量ならびに尿滲透圧を検討してみた。その結果、幼若乳児期にみられる容量的大量摂取の傾向は防ぎ得なかつたばかりか、却って、腎負担の為に38℃前後の発熱を来たすのを認め、人工栄養自律哺乳に適した粉乳汁の蛋白組成はかかる量的な面からの検討では説明出来ないことを知った。

次に、この問題を質的な面から検討する目的で、蛋白及び灰分組成の異なる四種類の粉乳汁を試作し、これらで健康乳児を比較哺育してみた。その結果、高カゼイン、低灰分組成の乳汁を摂取した群のみは生後0ヶ月から著しく急激な体重増加を示し、高ホエイ蛋白、高灰分組成の乳汁を摂取した群では非尿素N溶質の尿中排泄が他の三群より大であった。

ここにおいて、著者は高ホエイ蛋白、低灰分組成の乳汁と高カゼイン、高灰分組成の乳汁は一応誤りなく乳児に与えるものであるかの成績を得たが、前者については、これで新生児を哺育してみると、後者の場合より著しく多量のペプチドを尿中に排泄する事実を認めたので、更に検討し

た上で結論が出されねばならないと強調した。

日本小児科学会雑誌第73巻第1号（昭和44年1月1日発行）第I編及び第II編掲載予定

論文審査の結果の要旨

本研究は乳児至適蛋白摂取量を知る為に必要な自律哺乳法によって現在我国に広く行なわれつつある特殊調製粉乳が最良の栄養効果をあげうるか否かを検した。其の結果新しい改善と推奨されつつある高ホエイ、低灰分乳では乳児は多量に摂取しすぎることを見た。之は本粉乳が何物かにかける所があつて起る現象と解釈し粉乳の研究が更に促進されるべき事を警告している点、将来の為価値ある業積であると認める。よつて本研究者は、医学博士の学位を得る資格があると認める。